

映像ゼミナール 2013／冬

ミュージカル映画としての
『未完成交響楽』

——歌とリアリズムのはざままで——

作品上映（日本語字幕）と解説

講師：志村哲也

入場無料/申込み不要

【日時/場所】 2013年12月7日（土） 14:00～17:00

【会場】 上智大学 中央図書館 L821



お問い合わせ：上智大学ヨーロッパ研究所

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1, 上智大学中央図書館 7 階

Tel: 03-3238-3902 Fax: 03-3238-3533 E-mail: i-europe@sophia.ac.jp

ミュージカル映画としての『未成交響楽』

——歌とリアリズムのはざままで——

映画上映会（解説つき）入場無料

【講師】 志村哲也（上智大学非常勤講師）

【日時/場所】 2013年12月7日（土）14:00～17:00 上智大学 中央図書館 L821

20世紀前半のドイツ映画黄金時代（1929-33）における初期トーキー作品の多くはミュージカル仕立てであり、『嘆きの天使』『ガソリン・ボーイ三人組』『会議は踊る』『狂乱のモンテ・カルロ』『三文オペラ』等、数々の名作がその挿入歌と共に記憶されている。ナチ政権発足により黄金時代は終焉を迎えるが、その最後の輝きを放つのが『未成交響楽』（'33）だ。ここでも音楽が効果的に使用されており、主人公が作曲家フランツ・シューベルトであるために挿入曲の大半も彼の作品、すなわち19世紀のクラシック音楽になっている。この作品の成功でもって「楽聖映画」なるジャンルが創始された。

ドイツ語原題 *Leise flehen meine Lieder* はそのうちの一曲、いわゆる「シューベルトのセレナーデ」の歌い出しであり、これを含め「菩提樹」「野ばら」「アヴェ・マリア」といった、誰もが知っている名曲ばかりが選曲されている。しかしそのいずれもが（いわば観客への挑戦として）予想外の場面・タイミングで挿入されることで陳腐化を防いでいる。それもBGMや劇中劇としてではなく、また一般的なミュージカルにおけるような台詞の延長としてでもなく、あくまでアリストテレス的・古典的劇作法に則り「もっともらしい」形で、ドラマの一部として歌われることとなる。

史実のシューベルトの作品というアイデンティティと、歌とドラマとの連続性を両立させるという困難な試みの帰結であったが、ここにミュージカルやオペラ等の舞台芸術では問題とされえなかったリアリズムの呪縛という、初期映像芸術が直面させられたであろう制約が浮き彫りとなっている。しかし本作はそれに正面から立ち向かい、むしろ逆手に取ることで意外性を獲得し、それが本作を観客にとって忘れえぬものとしている。

『未成交響楽』（*Leise flehen meine Lieder*, 1933 ドイツ）

監督：ヴィリ・フォルスト

脚本：ヴィリ・フォルスト、ヴァルター・ライシュ

制作：グレゴール・ラビノヴィッチ、アルノルト・プレスブルガー

撮影：フランツ・ブラーナー

音楽：ヴィリ・シュミット＝ゲントナー

出演：ハンス・ヤーライ（シューベルト）、マルタ・エッゲルト（カロリーネ）、ルイーゼ・ウルリッヒ（エミー）

楽聖シューベルトの伝記映画。小学校で教鞭をとりながら貧しい生活を送るシューベルト。ある日、宮廷楽長サリエリの推薦で侯爵夫人の夜会に出席したシューベルトは、交響曲『未完成』として知られる曲をピアノで披露するが、途中でフィアンセの耳打ちに笑い出した夫人の姪カロリーネに腹を立て、演奏を止める。これを夫人は咎めるが、同時に姪の無礼を詫げる。暫くして、ハンガリーの伯爵から音楽の家庭教師に招かれた彼はそこで衝撃的な再会をする。侯爵夫人の夜会で出会ったカロリーネが生徒だったのだ。彼女は彼の毅然たる音楽への姿勢に共鳴し、教わるうち恋に落ちてゆく。しかし、彼と結婚すると言う娘を父親の伯爵は許さず、シューベルトは罷免される。結局、親の決めた相手に嫁ぐカロリーネ、その華燭の典にシューベルトも招かれ、『未完成』をピアノで弾くが、途中でカロリーネが慟哭の挙げ句、失神してしまう……。

